NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 6
2003. 9. 10

・理事挨拶
・報告－平成１５年度定例総会報告会
・世界の修復界は今－－イタリア－－
・シリーズ 保存修復の現場から
「縄文土器の修復という仕事を多くの人に広めたい」
・書籍紹介『文化財科学の事典』
・JCP 事務局通信

ご 挨 拶

ＮＰＯ ＪＣＰの準備を始めたのは平成12年７月。大阪のＮＰＯ支援センターに相談に行き、定款や申請書等を右往左往して作っていた頃がもう遙か昔のことのようです。今では会員も246名、外部からの問い合わせも増え、事業も少しずつではありますが進んでいます。

設立のきっかけは、私たち文化財に関係する専門家が、仕事として文化財に携わるだけではもったいないのではないか、という事でした。実際に現場にいると、仕事として携わる部分の外側に、より深刻な問題を抱えている人やものがあるということが分かってきます。それは、資金的な問題であったり、ノウハウの問題であったり、それぞれ状況は違ってはいるものの、方法次第では解決不可能ではないと考えました。様々な分野の専門家がネットワークを組んでそれぞれの出来ること、得意なことで力を出し合えば、出来る事の範囲は広がるはずだと思います。専門家というと修理技術者や研究者等の直接文化財に触れる人の事だと思われがちですが、それだけではなく、文化財の活用のプロである学芸員や行政に携わる人は当然として、人材を養成している大学関係の人、あるいはデータベースやネットワークを作ることの出来る人、材料・道具を作る人、通訳翻訳関係の人等々。そして、何より日々文化財を管理している所有者にこそ参加してほしいと考えています。こうした専門家のネットワークがあり、更に一般の人たちを含む社会に見守られてこそあらゆる事に対応出来るのだと信じています。

しかしながら、今現在、いくつかの課題もあります。
会員数を増やしてきましたが、まだまだ分野に偏りがあります。それぞれの本業が忙しくてまとまった活動をすることができない悩みがあります。また、国税庁認定ＮＰＯ法人※となれば寄付も受けやすくなるのですが、要件をなかなか満たせません。実際、それが出来たとしてどれほどの寄付を集めることが出来るのか。それなら、ＮＰＯとして何をもって運営していくのか。この組織の形態からするとコンサルタント業務を事業化していく方向も適しているように思えますが、日本ではそう言ったものにお金を払う習慣がありません。では、収益事業を行ってその収益をもって活動するのか。結論は出ていません。
これから、よりＮＰＯらしい支援事業を組み立てていきたいと思います。会員の皆様のご協力、というより、積極的な御参加をお願いします。ＮＰＯの基本は、自分の意志で自主的に活動することです。

特定非営利活動法人　ジェー・シー・ピー
副理事長　大林　賢太郎

※認定ＮＰＯ法人とは、国税庁の定めた一定の要件(収入の5分の1が寄付／会費で成り立っている、受け入れ寄付金総額の70%以上を特定非営利活動に係る事業費に充てている、など)を満たし、公益性が非常に高いと認められたＮＰＯで、寄付控除など税制上の特例措置を受けられる。現在13,000近くあるＮＰＯ法人の内、認定されているのはわずか15法人にすぎない。

報告

平成１５年度／於：京都造形芸術大学

ＮＰＯ ＪＣＰ 定例総会報告会

八木　三香（NPO JCP事務局）

平成15年6月7日（土）12：30より、京都造形芸術大学NA409教室において、理事、運営会員による平成15年度定例総会を行い、引き続き翌8日（日）16:40より、同所において、会員・非会員を含めた総会の報告会と交流会を行いました。すでにメールマガジンにて概要を報告しておりますので、1部の方には重複する部分があると思いますが、改めて報告させて頂きます。

平成15年度定例総会は、例年通り文化財保存修復学会大会に期日を合わせ、大会会場となった大学の教室を借りて行いました。これは、ＪＣＰの会員で文化財保存修復学会に所属している人が多いため、全国に散らばる会員の利便を考え設定しているものです。2日間にわたる大会の中で、１日目の７日（土）に理事と運営会員による定例総会を、２日目の８日（日）に全会員を対象とした総会報告会と交流会を行いました。

○総会と運営会員について

さて、ここでちょっと退屈かもしれませんが、運営会員とその他の会員の違いをご説明しておきます。

皆様にお配りした会員規約には、「運営会員をもってこの法人における社員とし、議決権を有する」とあります。これに対し、登録会員と一般会員、賛助会員は総会における議決権はないが、出席して意見を述べることができる、となっています。法における社員とは、株式会社で言えば株主に相当します。そのため株主総会にあたる最高意志決定機関――総会――を構成し、事業報告や収支決算、理事の承認･･･など運営に関わる事項を議決する役割を担っているわけです。その他の会員はそうした役割を担っておらず議決権はありませんが、透明性を信条とする当会においては、会員種別にかかわらず総会には出席して意見を述べる機会を設けているわけです。

去年日大で初めて総会を行ったときは、全会員が出席する中で議決をとりましたため、運営会員とそれ以外の会員を区別することができず、進行の不備を反省いたしました。そこで今年は２日に分け、運営会員以外の会員へは総会の結果報告とともにご意見を頂き、そのまま交流会にするという形を取ってみました。参加された方、いかがだったでしょうか？

その中で、ではいったいどういう人が運営会員なのかというご意見も頂きました。運営会員は現在１６名、当初からのメンバーもいれば、こちらから運営能力や公明性を見込んでお願いした方もいます。運営に関与するという意味で会費も３万円と経済面でも多くを負ってくれています。一緒に運営に取り組んでみたいとおっしゃる方はどうぞエントリーしてください。

運営会員は、今後順次誌面にも登場してもらおうと思っています。

○総会における決定事項

1. 平成14年度事業報告／会計報告

別項のように報告があり、承認されました。

2. 理事改選

理事の任期満了に伴い、定款に従って理事の改選が行われました。現在の理事は再任され、新たに谷久光氏が理事として選任され、承認されました。また、監事として新たに豊嶋徹氏（税理士・豊嶋税理士事務所）が選任されました。新役員は以下の通りです。

理事長：三輪嘉六
副理事長：大林賢太郎
理事：伊原惠司／白井久明／谷久光（事務局長兼任）／増澤文武
監事：豊嶋徹

3. 名称変更

現在の正式名称「ジェー・シー・ピー」は、以前から団体の内容が分かりにくいという指摘があり、理事の間で変更を求める声がありました。何度かの議論を経て、現在サブタイトルとなっている「文化財保存支援機構」に変更することが、今回の総会で正式に決定いたしました。ただし、この名称が正式に使用できるようになるのは、所轄庁への申請を経て登記が完了する10月頃になる予定です。登記が完了しましたらすぐにお知らせいたします。

4. 平成15年度事業計画

いくつかの事業計画が示され、承認されましたが、現在動いている事業は以下の通りです。

Ⅰ．依頼事業
①東博浮世絵マウント
②美浦村壁画修復支援
③（株）パイロット所蔵品保存計画支援
④ミュージアム都留所蔵品DB作成支援
⑤韓国壁画修復支援

Ⅱ．自主事業
①プロジェクト報告会（敦煌、東博など・計画中）
②交流会、茶話会
③ワークショップ（計画中）

中でも今年度は、敦煌莫高窟への派遣がSARSの影響で中止になってしまいました。スタンバイしていてくれた派遣予定の会員には、大変ご迷惑をおかけしました。

○交流会

交流会には40名ほどが参加してくれました。文化財保存修復学会大会終了後ということもあって、非会員、学生が参加してくれたのは何よりでした。学生からは、学生同士の交流を促進して欲しい、ＪＣＰ側からの提案だけでなく、学生の持っているものを引き出して欲しい、など要望が寄せられました。

また、修復事業を推進するにあたり、一般業者とどのように住み分けているのか、また実際技術者を派遣する場合、その選択はどのような基準で行っているのか、などの質問が寄せられました。この2点に関しては、ＮＰＯの根幹に関わる課題として、理事から以下のように回答を寄せてもらいました。

・大林理事からは、ＪＣＰは基本的に事業を「支援」する立場であり、修復事業そのものより、メンテナンスやサポートに重きを置いていくスタンスであると言う見解が示されました。

・白井理事からは、ＮＰＯとしては国指定の文化財よりも、町や市などに目を向けていく必要があるという意見が出されました。特に未指定品の場合、誰に相談したらいいのか、お金はどうしたらよいのか、など悩みを抱えているところが多いと思われ、相談できるような場としてJCPに可能性がある。こんなことが困っていると言う情報を皆さんから挙げてもらい、民間のお金を集めたり、相談に乗ったりする中で、文化財を大事にする心を育てていくことが大事なのではないか。専門家も特殊なところで特殊なことをやっているだけと言うのでは、既存の団体と変わるところがない。ＪＣＰは何をしてくれるのだろう、ではなく、こういうことをいっしょにやりたい、と発信していくことが大事なのではないか、と熱く語られました。またそのためには逆ににどういう人がどういう技術を持ってどこにいるのか、というDBをJCPが作っていく必要がある、という課題も出されました。

・谷理事からは、文化財クリニックシステムの構想が示されました。大病院ではなく、地域に根ざした医療をめざす。対象は、例えば歴史民俗資料など身近なもの、未指定の文化財など。そうすれば住み分けは自ずとできるのではないか。専属の場所や医者を抱えられれば理想的ではあるが、まず臨床医である技術者を紹介するネットワークを構築し、巡回治療という方法も考えている、予算は国や市の補助金などで利用できるものがまだまだある・・・などなど、ジャーナリストらしい視点からアイディアを披露されました。

・増澤理事は、今は産みの苦しみで、人をどうするのか、費用は？などの問題を抱えつつ、ともかく一般の方や学生さんにも入ってきてもらい、物を動かしつつ考えるしかないのでは、という意見を述べられました。特に最近入札が増えているが、発注側がその前の設計をどうするのか、という悩みがある。その辺に第三者機関としてのNPOに期待されるものがあるのでは？という具体的なひとつの道筋を示してくれました。

いずれにせよ、一つのシステムがスムーズに動くようになるまでは時間がかかります。焦りは禁物ですが、だからといって立ち止まってはいられません。行動を起こしつつ、具体的事例を積み重ねていくしかないのではないでしょうか。どのように能力のある個人でも、また組織でも、一人（１箇所）で出来ることには限界があります。ＮＰＯという「場」を利用して、職種を越えた交流を持ち、議論を重ねてほしいと思います。

また、関東での事業がどうしても中心になりがちなので、関西方面での活動も必要という提案がありました。関西在住の会員で有志の方は、是非お申し出下さい。皆様の力を貸して頂ければ幸いです。

ＪＣＰの活動に参加して

金子　真紀（平成14年度「紙の国際研修プロジェクト」ボランティア）

紙の研修に参加してかなりの月日が経ったが、今でも出来上がった報告書を見るたびに熱い思いがこみ上げてくる。この思いは、伝統文化を短時間のうちに獲得しようと熱意を持って、同じ目的に向かって進んだ参加者全ての共通のものであると確信している。

さかのぼること数年、３年間の海外生活の中で、芸術にかなりの興味を持った。美術館巡り、オークションの世界、宝石の世界等、アートのカテゴリーであれば何でも時間の許す限り、その地へ足を運び、その世界に飛び込んでみた。そして帰国の数ヶ月前に出会ったのが修復の世界であった。

米国滞在時に受けた印象では自国のアートの保存・修復はもちろんのこと、美術館の所蔵するもの、オークションで取り扱われる品々は鍛錬された保存・修復あってのものであった。新しいアートが続々と誕生する一方で、修復・保存技術は必要不可欠な研究分野であった。中でも興味深いのは米国で、日本の芸術品の修復技術が熱望されているということであった。果たして、日本の修復技術はその供給の上で、いつでも期待に応える技術が整っているのであろうか。そんな疑問をもって日本へ帰国した。

ある新聞のコラムから、ＪＣＰの存在を偶然にも知り得てその扉を叩いた。技術もなく、英語力も今ひとつであったが、勇気をもってちょっとだけ背伸びをしてみるつもりであった。何ができるという自信もなかったが、自分の力の限り頑張ってみる気持ちになれたのは、ＪＣＰの方々の温かい歓迎によるものであったと感謝している。

ドキドキの研修初日を迎えた。その日は研修の第一日目にはちょっと気の毒な大雨であった。緊張のあまり思うように言葉のでない始まりとなってしまった。おそらく、研修生達は新しい場所、顔ぶれに私以上に固まっていたのではないかと思う。ＪＣＰの皆さん、そして東京文化財研究所の皆さんはそんな私を、そして研修生達をなんと上手に温かく迎えてくれるのであろうと感動したことが今でも鮮明に記憶に残っている。

いよいよ紙の研修の実技に入ると、実演者の素晴らしい手さばきと知識に圧倒された。世界のさまざまな国から来ている研修者の目は真剣そのものであり、その独自のスタイルをもって研修内容をマスターする姿は素晴らしく美しかった。

わからないことをそのままにせずに、質問をする姿勢は短期間にできる限りのことを獲得しようとする姿勢の表れであり、教室内にはいつも緊張感があった。参加者全員が必死であったのはいうまでもない。私自身もその真摯な姿勢に刺激された。講義内容も関係者以外はなかなか触れることのできないものであり、週２，３回の約束ではあったが結局、毎日参加できるようにお願いした。それだけ、未知の世界の技術は私や研修生達を魅了するものであったのだと思う。

同じ志を持つ仲間は結束が固いと思っていたとおり、第二週目にはすでに、お互いの会話もはずみ、私自身、研修生との交流をはかりたいと、講義前、休憩間にはコミュニケーションをしたいと思うようになった。内容の濃い講義を終えたのにもかかわらず、ほぼ毎日のように、数名の研修者は更に紙に関しての勉強をしていた。各々の国の代表として大きな責任を背負って参加していたこともあるのだろうが、各人の熱意に、ちょっとだけこの世界を覗いてみようと安易に考えていた自分自身が恥ずかしくなった。日本の伝統文化を守ろうと必死になっている外国人研修生に、逆に自国の文化保存の大切さを教えられた気がした。

このようにして、ＪＣＰの、東京文化財研究所、研修生の皆様のおかげで、普段の生活では出会えないさまざまな人に巡り会え、少しだけこの世界の色を感じ取れたのは、幸運なことであった。海外で得た、ちょっとした疑問が運良くこのような体験にまで発展し、これを機に、おそらく将来にわたって自己の生涯のテーマとして育てていけることは短い期間で得られた私の宝物である。いつまでもこの情熱を持ち続け、前進できることを願っている。

金子真紀さんプロフィール
- **神奈川県生まれ**
- **聖心女子大学卒業後、米国宝石学会にて鑑定・デザイン資格取得**
- **米国クリスティーズ・アートコースに参加**
- **2000年よりフリーで活動。**

世界の修復界は今　第４弾　イタリア

「イタリアの絵画修復教育事情」

絵画修復家　青木　享起

修復の技術を学びたい者にとって、イタリアほど門戸を開いて誰でもいつでも勉強出来る環境を提供してくれる国はないでしょう。イタリアは州の独自性が強く、各州によって違いはありますが、私が過ごしたフィレンツェはトスカーナ州の首都で、職人の街として有名であり、特に修復については昔から関心が高く盛んなところです。この街だけで何千人と言う数の修復家が、イタリア人のみならず世界中から集まりしのぎを削っています。修復家の人口密度は世界一と言って良いでしょう。

今回はそのイタリアを代表する修復の街フィレンツェにある修復専門の学校を紹介しましょう。

修復の技術を身につける方法としてはいくつかの選択肢があります。

一番手っ取り早いのは工房の門をたたき弟子入りする事ですが、イタリアはコネ社会なので誰かの紹介が必要でしょう。しかし日本人はわりあいと信用されているので、いきなり尋ねて入れてもらえるケースもあります。

修復技術とそのバックボーンとなる基本的な理念や科学的な知識を総合的に学ぶにはやはり修復の専門学校で学ぶのが良いと思います。

修復の専門学校も国立の修復研究所の修復家養成学校から修復塾のような所まで色々あります。

国立の修復研究所はローマの中央修復研究所（Istituto Centrale per il Restauro）とフィレンツェの貴石研究所（Opificio delle Pietre Dure）の２校のみで、募集人員も少なく200倍ほどの倍率の試験を突破しなくてはならない非常に狭き門です。以前は外国人枠が１名あり日本人が入学した例もありますが、現在はイタリア人と一緒に試験を受けなければなりません。

次に国立の学校に準ずるものとして州立の修復専門学校（あるいは州政府の認定した修復専門学校）があります。

フィレンツェには修復の学校としては歴史も古く規模的にも大きなパラッツォ・スピネッリ修復研究所（Istituto per l' arte e il Restauro Palazzo Spinelli）と近年認定された国際芸術大学（Universita Internazionare del Arte）の絵画修復コースの２校があります。

その他にも公立の職業訓練所にも修復課程があり、アメリカの大学のフィレンツェ分校では英語で修復の授業が行なわれています。また実技だけを教える塾のようなスタジオは街のあちこちに見られます。

私はパラッツォ・スピネッリ修復研究所の絵画修復コースに入りましたが、この学校には他にも紙本絵画修復、フレスコ画修復、木製品修復、陶磁器修復、織物修復等のコースがあり、修復士の認定試験も各々のコース別に行なわれます。

期間は３年間で、最初の２年間で基礎的な技術を一通り学び、工房で親方の指示に従って仕事が出来る能力を修得します。２年終了時には州が行なう修復士補の認定試験を受ける事が出来ます。

最後の１年間は修復作業の責任者として自分で判断して実行する能力を身につけます。そして３年終了時に州が行なう修復士の認定試験を受ける事が出来ます。

１クラスは１５人ほどの編成で、イタリア人と留学生の数が半々位です。男女比率は女性が７割から８割位で圧倒的に女性優位です。１年間は３学期に分かれていて学期末には試験があります。入学は簡単ですが学期末毎の試験をクリアするのには苦労します。イタリアの試験は殆どが口述試験なので筆記試験で育った日本人にとっては慣れるまで大変です。特に１年生の時は実技よりも理論が多いので入学以前の問題としてイタリア語をしっかりと勉強しておく必要があります。

授業内容は化学、生物学、美術史、修復理論、法規、デッサン（模写が主体）、調査記録（写真撮影技法を含む）、美的修復技法、保存修復技法、金箔技法、板絵修復技法等で理論と実技をうまく噛み合せて教えています。

３年度終了時に行なわれる州の認定試験は、実技試験が１日、科目別口述試験が１日の２日間にわたって行なわれます。試験官は州当局の試験官の他に他校の教授や修復家及び試験官を委嘱された本校の教授からなる総勢８名で構成され、最終的には８名の合意により試験結果が出されます。試験に先立ち受験申請書（成績証明書等を含む）と同時に論文を提出して審査を受けなければなりません。

学校を卒業し州の認定資格を取ったからと言っていきなり一人前扱いをしてはもらえません。更に工房でインターンを数年経験した後に、はじめて一人前として認められます。

イタリアはＥＵ統合後、政治経済のみならず文化の面でも変化しはじめており、数年前から修復士の資格制度も見直されています。いずれはヨーロッパ内の制度上の格差は無くなると思われますが、現在は過渡期のためか各州、各学校によって取り組みにばらつきがあるように感じられます。

近年修復に関する新しい素材が次々と開発され、それに伴って修復技法も変化しており、教育現場においても伝統的技法の上にいかに新しい技法を付加して行くか、いかに見直して行くかが問われています。

私は毎年イタリアに出かけてあちこちの工房を訪問していますが、行く度に新しい発見があります。それは新素材のみならず日本の伝統的な素材や技法の利点も取り込んで技術の巾を広げようと言う職人としての懐の深さから生まれるものなのです。

青木　享起さんプロフィール
・昭和11年　広島県生まれ
・カリフォルニア大学芸術学部版画教室
・日本航空勤務
・パラッツォ・スピネッリ修復研究所、絵画修復コース終了
・ステファノ・ガロシ工房を経て現在
・青木絵画修復工房代表
・横浜絵画修復教室主宰
・イタリアにおける絵画修復士の資格を持つ

保存修理の現場から

（インタビュアー：浜名純／三浦功美子）

「縄文土器の修復という仕事を多くの人に広めたい」

有限会社　武蔵野文化財修復研究所　代表取締役　石原　道知さん

修復の過程で起こった思わぬできごと

石原さんが土器の修復をはじめとする文化財修復の仕事を始めたのは、24歳の夏だった。1988年（昭和63）である。小さい頃から美術や手を動かしてものを作るのが好きだった。父が橋の設計、叔父が中学校の美術教師、父方、母方の両方のおじいさんが大工という家系だ。石原さんも中学、高校と美術部。武蔵野美術短大の油絵科を卒業し、2、３年の後「食べるために」ツテをたどって埋蔵文化財修復の大手「芸匠」に入ったのである。

「まだバブル期で仕事はたくさんありました。博物館が次々作られ、そこで展示するレプリカ作りに追われました。修復の仕事よりレプリカの方が多い時代でした」。

埼玉県の東山遺跡から出土した「瓦塔」の修復をした時のことは今でも忘れられない。瓦塔とは、文字通り瓦で作った小さな塔で、民衆が拝むための宗教的なものである。関東で多く出土するが、東山遺跡のものは残りが良く重要視されており、二塔分あるとされていた。石原さんは、ていねいに破片を接着し修復していったところ、なんと一塔になってしまった。文化財の数が一つ減ってしまったのだから大変である。大いに論争になった。

「私も当時は28歳。元気でした。自説を曲げずに主張し結局一つで正しいということで落ち着きました。それでも納品の時、私は納得できないと言う方もいました」という。

やがてバブルがはじけ、仕事も減ったのを機に1993年(平成5年)夏、独立した。同僚3人と立ち上げたのが、「武蔵野文化財修復研究所」である。現在、専務取締役の西方豊子さんも創立メンバーの一人だ。土器の復元と修理、金属の保存処理、博物館展示用の複製などに取り組んでいる。

“縄文”埋蔵物のつきない魅力

最初のころは、石原さんの奥さんも彩色を手伝って、気がついたら徹夜になるなど大変だった。「例の瓦塔のレプリカを頼まれたのが本格的な仕事の初めです。修復した人間に任せたいと言われました。今、それが埼玉県歴史資料館に展示されていますが、修復時に納得できないと言われた方から『石原君の修復でよかった』といわれたのが本当にうれしかった」。1997年(平成9年)から群馬県北橘村道訓前遺跡のの縄文土器の修復に取りかかり、昨年までかかって仕上げた。縄文時代の土器のうち深鉢や浅鉢が主で全部で50点ほどあった。解体した土器の破片同士がくっつくかどうか確認し、接合していく。かけていたり欠落している部分が出てくるので樹脂で充填して形を整え、彩色をしてやっと完成だ。

「彩色するといっても、新しく樹脂で作った欠落した部分を本物そっくりの色にするのか、復元した部分と新しい部分を色分けして違いが分かるようするのか、きわめて個人の主観的な問題になりむずかしいです。最近、点描を使い、離れてみれば見分けがつかないが、近づくと復元部が分かるような仕上げに取り組んだこともありました」という。以前は、似せるだけ似せて作るのが職人の間で競われた感があった。最近は、オリジナルと復元部分とが分かりながらも美しい復元というのを心がけているという。

埋蔵物の修復作業の面白さはどこにあるのだろうか。完全にオリジナルなものを作っているわけではないが、大いに想像力を働かせなければならないのも事実だ。10人研究者がいれば、いろいろな意見が出てくる。それらを総合しながら復元を行う。「破片のないところはどんな形をしていたのだろうと考えます。縄文土器は、一つとして同じ形のものはありません。なぜなら単一規格の大量生産という工業デザインではなく、一つ一つ手作りだからです。でも、同じ用途に使う土器がいくつか出土しているので、それを参考にして欠落した破片の姿を想像するんです。それこそ難しくて、でも面白い作業といえるのではないでしょうか」。

どうしても欠落した部分の形が分からなくて困っていたら、その土器が出土したところから数メートル離れた地点から、ぴたっと形が合う破片が出てきたこともある。縄文の神がいるのかもしれない、と感じさせられた。

土器のメンテナンスに力を入れたい

現在は6人で種々の作業をこなしている。最近は、鉄器など金属関係の埋蔵物の復元の仕事が多くなってきた。土器と異なり古墳時代の鉄などは、放置しておくと錆だらけになり最後には粉になって土に戻りまったく形もなくなってしまう。それで保存処理が急がれるのだ。錆落としのためのクリーニングや脱塩など、根気のいる細かい手作業をこつこつと積み重ねていくのである。管理・事務担当の西方さんは「経理の面からいうとこれで採算が合うのかと心配になるほどです」と笑う。みな、プロの職人を自負しているのだ。

○石原道知さんプロフィール
- 1965年1月、熊本県生まれ。
- 父親の転勤に伴い、福岡、鹿児島など九州で小中学校を過ごす。高校は神奈川県
- 武蔵野美術短期大学を卒業後、「芸匠」入社。
- 1993年に独立し現在に至る。

たった3人で会社を設立してから、今年でちょうど10年経った。土器や金属のほかに埼玉県嵐山町の畠山重忠公像補修工事などの石造物保存修理、東京都大田区郷土博物館のトイレ遺構などの模型製作も扱っている。

石原さんはこんな夢を描いている。「関東の博物館のすべての縄文土器のメンテナンスをやってみたいんです」。博物館などで所有している土器のうち、お金をかけて復元したり修復するのはほんの一部である。また、昔、石膏で修復したものを改めて修復し直すという仕事も入ってくるが、オリジナルの土器の破片が石膏に覆われてしまっていて、これらを無理に取り除こうとすると傷めるおそれもあるような粗雑なものが多い。また土器全体が石膏の粒子や埃で覆われ、本来の味がまったく失われているものもある。それをクリーニングするだけでも美しくなるというのである。

「それともう一つ。それぞれの博物館などで発掘に携わっている人の中に、本当に手先の器用な人がいるんです。ていねいな仕事をしてくれます。そんな人たちにお金を取れる修復・復元のノウハウを教えていきたいんです。ちょっとした修理なら自分たちでやってしまえるようになる。一見、うちの仕事がなくなってしまうようですが、土器をはじめとする埋蔵物への地元市民の関心が深まってくれればいいと思います。それが、うちの仕事にもやがて還元されるはずです」と石原さんは語るのである。

書籍紹介

『文化財科学の事典』

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊編集　朝倉書店・2003年6月刊・定価：12,000円

「文化財」という言葉に含まれる事柄は広範囲である。分野も多岐に渡り、携わり方もいろいろある。その中の分野に文化財科学がある。まえがきで編集者代表の馬渕久夫氏がこう述べている。「文化財科学は人文科学、自然科学、社会科学の３極構造をもった学問分野である。」

私個人としても、文化財のいろいろな分野の橋渡しの役目をするのが文化財科学だと思っている。

本書は、Ⅰ文化財の保護、Ⅱ材料から見た文化財、Ⅲ文化財保存の科学と技術、Ⅳ文化財の画像観察法、Ⅴ文化財の計測法、Ⅵ古代人間生活の研究法、Ⅶ年表、Ⅷ用語解説の各項目に分かれている。

タイトルに「科学」という言葉がつくと、化学記号に化学式、数式、表グラフと思わずひるんでしまいそうになるが、化学的性質だけが並んでいる解説ではなく、用語の解説に歴史的なこと、トピックスやコラムなどもや、また参考文献なども載っている項目があり、理解しやすい事典だと思う。

文化財保護の法規と理念から始まり、国内外の機関やネットワークなどの解説もある。材質の解説、文化財の保存修復について、調査方法や使用する機器の解説、人類学や考古学についてなどなどとなっている。文化財といってもかなり広範囲であり、分野が違うとそれぞれの分野の参考文献を調べないと分からないことが多かったのだが、文化財という枠で絞っている事典なので、まずこの事典を開くことから始めればよい。

また、調べるために事典を引くだけではなく、読み物としての感覚で最初から読み通してもいいし、雑学を身に付けるためパラパラめくりながら飛ばし読みしても、おもしろい本だと思う。但し、持ち歩いて電車などで読むには少々つらいだろう。本が重い。このサイズ、厚さの他の本と比べてズッシリとくる。

（三浦　功美子）

※上記書籍を期間限定にて１割引きで購入できます。（送料別）
購入御希望の方は10月末日までに、ファックスまたはメールにて当会事務局までお申し込み下さい。
（ＮＰＯ　ＪＣＰ事務局　FAX:03-5363-4533　E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org

ＪＣＰからのお知らせ

○特種製紙Ｐａｍの見学会のお知らせ

日　時：2003年９月20日（土）13：30～16：00
会　場：特種製紙総合技術研究所ＰＡＭ
http://www.tokushu-paper.jp/
静岡県駿東郡長泉町本宿４３７
電話：055-988-2401

見学会の詳細はArchivists in Japanのページをご覧下さい。
http://www.archivists.com/seminar.html

○平成１５年度画像保存セミナー

・日　時：平成15年10月17日（金）　9:40 ～ 17:00
・会　場：東京工芸大学　芸術情報館　メインホール
東京都中野区本町2-4-7（地下鉄丸の内線・大江戸線　中野坂上駅より徒歩約７分）
・主　催：社団法人　日本写真学会
・協　賛：日本写真芸術学会／文化財保存修復学会／（財）日本博物館協会
・参加費：日本写真学会会員及び協賛学協会会員　6,000円
会員外　8,000円
学生　2,000円
・定　員：165名
・申込締切：平成15年9月26日
・申し込み方法については、日本写真学会へ直接お問い合せ下さい。
〒164-8678　中野区本町2-9-5　東京工芸大学内
（社）日本写真学会　TEL：03-3373-0742
FAX：03-3299-5887

○第１１回　和紙文化講演会『現代の和紙』

――手漉き紙の多彩な展開――
・日　時：平成15年11月22日（土）　10:00 ～ 17:30
・会　場：昭和女子大学グリーンホール
・主　催：和紙文化研究会
・後　援：文化財保存修復学会

・参加費：一般　3,500円（機関誌「和紙文化研究」第11号及び講演要旨集を含む）
・定　員：250名
・参加申し込み方法：郵便振替による事前払込制。
振り込み期限；11月13日（木）
住所、氏名、電話／FAX番号、専門分野もしくは所属を郵便振替用紙にご記入の上、参加費をお振込みください。
振込先;郵便振替口座;00170-8-402506　「和紙文化講演会」
・事務局：〒110-8714　東京都台東区上野公園12-8
東京藝術大学　保存科学教室気付
第11回　和紙文化講演会事務局　稲葉政満
電話：03-5685-7656／FAX：03-5685-7780
※昭和女子大学へのお問い合わせはご遠慮ください。

○*「文化財の保存と修復（Ⅱ）」*
－科学で探る先達の知恵－
文部科学省科学研究費補助金成果公開促進費「研究成果公開発表(B)」
・日　時：平成15年10月19日（日）　9:40 ～ 16:40
・会　場：東京芸術大学・奏楽堂　（収容1,140名：先着順）
・主　催：文化財保存修復学会
・後　援：文化庁・台東区・朝日新聞社・東京国立博物館・日本文化財科学会・国宝修理装こう師連盟・全国大学博物館学講座協議会・NPO文化財保存支援機構

○*アフガニスタン講座*
「アフガニスタン・その歴史と現在」
・日　時：平成15年11月30日（日）　13:15 ～ 16:15
・会　場：グリーンホール船堀（江戸川区総合区民ホール）
303会場・56席（江戸川区船堀4-1-1）
・主　催：NPO野外調査研究所
・後　援：NPO日本国連HCR協会、NPO JCP
・参加費：野外調査研究所会員　無料／非会員　500円
・定　員：先着55名
・参加申込方法：ハガキにて下記まで(1葉で何人でも記入可)
・宛先；〒330-0042　埼玉県さいたま市浦和区木崎5-19-17
朱通祥男

○*ヨーロッパ古典派絵画と第２回修復展*
・会　期：平成15年11月25日（火）～12月1日（月）
・時　間：10:00 ～ 21:00
（初日は14:00から、最終日は17:00まで）
・会　場：みなとみらい21
赤レンガ倉庫1号館2階Cスペース
・主　催：青木絵画修復工房

ご入会ありがとうございました。

（平成15年9月1日現在入会者数）

□理事　6名　□運営会員　16名
□登録会員　102名　□一般会員　105名
□賛助会員　17件

㈱宇佐美松鶴堂
㈱岡墨光堂
（財）元興寺文化財研究所
京都造形芸術大学
歴史遺産研究センター
（有）坂田墨珠堂
昭和不動産
靖斎文化財保存研究所
日本通運株式会社美術品事業部
羽生　卓史
㈱半田九清堂
百元　節
フレンドトラベル
文化財保存
溝川商店
他個人3名
（アイウエオ順・敬称略）

ご寄附をありがとうございました。

・増田　勝彦様　・佐藤　隆明様

NPO JCPの活動に参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費　7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で，文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費　5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費　一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
・講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL:www.jcpnpo.org
※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用下さい。
・郵便振替　00120-4-10545　NPO JCP
・みずほ銀行　根津駅前支店　普通預金　1727893

NPO JCP NEWS
第6号
2003年9月10日発行
特定非営利活動法人　ジェー・シー・ピー
〒160-0008
新宿区三栄町6番地　小椋ビル403号
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org

〈理　事〉
三輪 嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長）
増澤 文武
白井 久明
伊原 惠司
谷　久光（事務局長）
〈評議員〉
三輪 嘉六
増澤 文武
伊原 惠司
三浦 定俊
田畔 徳一
〈編集協力〉　浜名　純（牧童舎）・嶋根 隆一・三浦 功美子
〈事務局〉　谷 久光（事務局長）・八木 三香（総務部長）
松本 洋子・白戸満喜子・三浦功美子